

令和五年十月三十(月)〜三十一日(火)

箱根仙石原の湿生花園に吟行(兼題無し)。

吟行後、句会を、西川先生ご夫妻のご厚意により

三菱倉庫仙石原荘で開催。出席者は十二名。

大津 そうかい

水澄むや鯉の水輪の揺らす雲

木道をひとり歩めば秋の声

竜胆や金時山のかの娘

中村 晃也

どこからの風どこまでも芒原

箱根路の風に芒の揺れやます

山裾へ夜風溶け行く芒原

内藤 まりこ

ニシギの小さき赤の実天高し

青空に紅いもみじの誇らしげ

水音の静けき沼や秋の声

松田 一文字

秋の日の白雲うつす池塘かな

すすき原真直(ますく)の道に影ふたつ

竜胆や木道に沿ふそこらに

首藤 しずを

穂芒や高速バスの飛ぶがごと

秋日吸ひ真鯉の吐けるあぶくかな

枯れすすむ中に青濃き竜胆花

新田 ゆふき

夕風に蜘蛛の糸引く水引き草

古湯温し針曇りたる丸時計

湯煙の溪に霏ひて秋朝日

宮原 凧

箱根路のこの深秋を歩きけり

湿原や一際赤き冬紅葉

カーブごと富士山(ふじ)追ひかくる車窓かな

長尾 進一郎

仙石の静けき原や冬近く

天高し外輪山の底に立ち

木道の吾を迎へし吾亦紅

志村 良知

もみぢひとは神代の杉のおわす池

天高し片葉の葦は誰を慕ふ

木漏れ日に群るる紫鳥兜

安藤 晃二

花蜂来竜胆の青揺らしけり

秋色の草山に湧く巨き雲

尾花群れ金時山(きんとき)を攻め風荒し

西川 知世

風に色生るるひと日の芒原

秋丁字蒼し水音ま近にし

枝先の楓緋の色遠峰晴れ

西川 進(特別参加)

黄葉の合ひ間輝くすすき原

陽射し浴び紅葉づたひのモンシロチョウ

紅葉に負けじと一団コウホネ草

次回は令和五年十二月七日(木)です。兼題は、

季語「帰り花」(大津そうかいさん出題)、席題は

西川知世さん出題の「枯」です。

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

帰り花は、十一月の暖かい日ざしに誘われて、春に咲く花が季節はずれの花をつけること。多くは桜をいうが、庭木、蒲公英など生活の近辺にある花も対象である。傍題はたくさんあって、返り花・帰咲・二度咲・忘花・忘咲・狂花・狂咲。和歌や連歌ではあまり詠われないそうだが、俳句ではよく詠まれている。早や台風で樹木に影響があった

年に多いといわれるそう。単に帰り花といえば桜として鑑賞することが多い。

凧に匂ひやつけし帰花

芭蕉

かへり花暁の月にちりつくす

蕪村

あたら日のついと入りけり帰花

一茶

日に消えて又現れぬ帰花

高浜虚子

真青な葉も二三枚返り花

阿波野素十

梨棚や漬えんとして返り花

水原秋櫻子

帰り花兄弟睦びあひにけり

安住 敦

義理果し憂き日を躑躅狂ひ咲く

井上光樹

帰り花三年教へし書にはさむ

中村草田男

返り花身は荒草の花ながら

中村苑子

島一つ一村なせり帰り花

有働 亨

帰り花空は風音もて応ふ

廣瀬直人

返り花知己のひとりは国の外

友岡子郷

返り花見しこめかみの軽くなる

遠藤正子

返り花野心なしと言ひきれず

三枝青雲